
突発的な関係

浅倉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

突発的な関係

【Nコード】

N0554K

【作者名】

浅倉

【あらすじ】

ある日突然父の家族が生きていることを知らされ、しかもそれが大財閥！！おまけに婚約話まで持ってこられ、ついでに転校までさせられた悠菜。御曹司とかお嬢様とか、とりあえず殴ってもいいだろうか？

第一話

「ふざけんじゃねえよ、クソじじい!!」

どこにでもある団地のとある一室から酷く汚い怒鳴り声があたりに響き渡った。

その住人の一人である少女は目の前に座る初老の男に今にも殴りかからん勢いで仁王立ちし、少女を必死に止めようと両親が両脇から羽交い絞めをしていた。

両者を隔てていた机の上のお茶はひっくり返り中身が床に滴っている。

「決定事項ですので」

この家を訪ねてきたときから変わらない笑顔で答えた男・篠原は、目の前で怒りを隠そうともせず感情の赴くままに行動する少女を見て、内心ため息をついていた。

想定外だった。

まさか少女がここまで粗暴な人間だとは思わなかった。

第一印象はかなり良かった、見知らぬ人間ってことで猫を被っていたのか愛想の良い笑顔は好感が持てた。

だが、話を進めていくうちに目に見えて不機嫌になり、結論を言ったところで現在の状況になったのだ。

念のためと連れてきた背後に座る部下の男たちも、いつでも動けるように身構えている。

「勝手に決めんじゃねえ!!」

「悠菜…落ち着きなさい。口が汚いわよ」

「うるせえ!!」

抵抗する悠菜を両親は無理矢理押さえつけ座らせようと、しばらく奮闘していた。

数分ほど、篠原の目の前で殴り合いに近い親子喧嘩が行われていたが、諦めたのか悠菜の体から力抜けたのが分かった。

それを確認して安心した両親の力が一瞬緩んだ、そして篠原は己の目を疑ったのだ。

悠菜は両親の力が緩んだのを見逃さなかった。

両親の片手をそれぞれ掴むと後方に捻り上げ、悲鳴を上げるのを軽く聞き流しそのまま背中を拳で強打した。

なんとも鮮やかな光景だった、見とれるほどに。

むせ返って崩れる両親をいやに口を歪ませて見下ろす悠菜、篠原はもうどうしていいか分からない。

「ざまあ」

吐き捨てるように言った悠菜に、篠原は深いため息を内心ついた。

粗暴でさらに口も悪い。

最早主人の命令を無視してでも篠原自身がこの話を無かったことにしたかった。

悠菜は崩れる両親を満足的に見下ろしそのまま踵を返して部屋から出ていこうとする。

実の両親にとつた行動に呆氣にとられていた部下だったが、悠菜が扉に手を駆けたところで我に返ったらしい。

捕まえようと悠菜に襲いかかる。

だが寸前で振り向いた悠菜の遠心力がプラスされた右ストレートを諸に顔面に食らった。

鼻血を出して倒れる部下。

それを見たもう一人が殴りかかろうとしたが右手のひらで受け止められ、さらに殴る勢いを殺されずに後方に流され、そのまま鳩尾に

膝蹴りを入れられた。

完全に沈黙する。

残った最後の一人が警戒して距離をひらく。

だが情け容赦が無い悠菜は嫌な笑みを顔に貼りつかせて近寄ると急に蹴りを入れ、崩れ落ちる途中で顔面に裏拳を入れた。

団地の一室の狭い廊下の壁がなんとも言えない音をたてた。

「男のくせに情けねえ」

足元で転がる男を何事もないように踏み越え悠菜はそのまま出て行った。

沈黙が室内に広がる。

一人何事もなく無傷の篠原は今度は隠さずため息をつくとき、おもむろに携帯を取り出しどこかに電話をかけた。

ワンコールで相手が出る。

「申し訳ありません、逃げられました。……………目の前で意識を失ってます。……………私の意見ですが、今回の件は無かったことにしたほうが宜しいかと。……………いえっはい……………ですが……………分かりました」

頭を抱えなくなった、というかこんな仕事止めたいとするら思える。しばらく携帯を握りしめ一呼吸いれると、またどこかに電話をかける。

またワンコールで相手が出たが、先程の人間とはまた違う。

団地のすぐそばに待機させていた別の部下だ。

「ちゃんと尾行しているな？俺が行くまで絶対見失うなよ」

電話を切り篠原は深いため息をつくとき、気絶している悠菜の両親を起こしにかかった。

「今日だけでどのくらいの幸せが逃げたことか」

一人ぼやく篠原の苦悩は、誰にも理解されることはない。

対する悠菜は自分が身一つで家を出てきたことを思い出して後悔していた。

お金も定期も携帯も無ければ誰か友達の家に泊めてもらうことすら出来ない。

運良く今は夏休みで時間だけは腐るほどある、2時間くらい歩いて仲の良い友達の家に行くことくらいなんてことはない。

「ああでもムツカツクウ!!」

事の始まりは1時間くらい前。

突然父の実家の人間だという篠原という男が訪ねてきたのが始まりだった。

父の家系についてはほとんど知らない。

兄弟はいないと聞いていたし、両親もだいぶ前に亡くなったと言っていた。

悠菜もとくにそれを疑問には思わなかった。

だがそれはどうやら嘘だったらしい。

実際は4人兄弟の末っ子で、さらに他の兄弟とは腹違いであり、婿養子だった祖父の死とともに他の兄弟とは不仲だった祖母ともども本家から追い出されたのが真相らしい。

現在悠菜達が名乗っている笹原は祖母の旧姓らしく、本家は久瀬というかなりの上流階級の家柄らしいのだが、何でそんなところが追い出した末弟の家にある日突然篠原を寄越したのかというと、理由

は簡単だ。

悠菜に見合い話を持ってきたのだ。

相手は久瀬と交流が深く大財閥である藤森の御曹司。

現久瀬当主と現藤森当主は学生時代からの仲らしく、結婚して子供が出来たら結婚させようと冗談半分に話が進んでいた。

あくまで酒の席の話だったので、それはそれで終わったはずだったのだが。

残念なことにそろそろ婚約者でも発表しないと世間体にもかかわるというのに、藤森の御曹司は遊び呆けて決まった女の一人もいないらしい。

それで酒の席の話が今回出されたのだ。

しかも藤森のお坊ちゃんは一子で、久瀬の兄弟のところも男ばかりが生まれた。

それで結局、久瀬当主は追い出したはずの弟の娘である悠菜を引っ張りだしたという訳だ。

全くもって意味が分からない。

しかも、久瀬は悠菜に転校するように言ってきた。

しかも現在住んでいる場所から遠く離れた完全寮制の両家の子息や令嬢ばかりが通う私立の学校だ。

ぶっ飛ばしてやりたい。

「今なら地球の裏側まで飛ばせる気がする、いや絶対に出来る！！」

どこにもぶつけられない怒りを撒き散らし、しばらく遠方までブラブラした先の公園でブランコに座った。

これからどうするか思案する。

「うーん、本気で誰かの家に泊めてもらわないとなあ……」

家にだけは絶対に帰りたくない。

親の顔すら見たくなかった。

唸りながら考えていると、背後で足音がした。

振り返ろうとしたが、近づいてくる気配に慌てて飛び退くと篠原が笑みを浮かべて立っていた。

その遠くで両親が不安げに立っているのが見える。

沸々と怒りが込み上げてくる。

悠菜は敵意を剥き出しにした。

「てめえ……なんでここが」

「念には念を、貴女のことはしっかりと部下に尾行させていました」

悠菜は舌打ちした。

「こちらにも不本意ですが、あくまで仕事ですので」

心底嫌そうな顔をして悠菜を見下ろしてくる、簡単に沸点を超えた。男とは言え初老、自分の敵でない。

そう判断し、悠菜は事前行動を全く見せず殴りかかった。

しかし、悠菜の予想を超えて拳を篠原はあっさり受け止めたのだ、しかもかなりの力を入れたのに梃子でも動かない。

「部下を同じように考えてもらっては困りますよ、これでも一通りの武術は嗜んでおりますので」

そう言うが否や、あっという間に悠菜は組み敷かれて捕獲されてしまった。

第一話（後書き）

突発的に恋愛ものを書きたくまりました。

王道（？）な内容になると思いますが、色々と酷いことになると思
います（＾p＾）

第二話

捕獲されてからは文字通りの軟禁生活だった。

自宅ではなく久瀬本家の一室に閉じ込められ、外界とは全て篠原と身の回りの世話をしてくれる女中さんが取り持っていた。

正直このクソつまらない生活から逃げ出そうと何度も思い行動したが、その度に失敗して結果的にガードを固くされてしまった。

そして現在久瀬本家主人、つまり父の兄と向かい合ってソファに座っていた。

向こうから訪ねてきたのだが、印象は最悪だった。

お互い歩み寄ろうとは全く思わなかったせいで敵意剥き出しでの初対面だった。

「愚弟が愚弟なら、その娘も目も当てられないな」

初っ端から酷い一言だ。

だが悠菜も負けてはいなかった。

どうせ篠原からこの間の件について報告が入っているだろう、遠慮はいらない。

「貴方もあの父の兄とは思えないほど歪な性格をお持ちのようで、さぞ下劣な青春を送られていたんでしょうね」

笑顔でそう返すと顔が妙にピクピクと動いた、それがまた見てて面白い。

「ちっ…、やっぱりあの女の血だな。目上に対する礼儀もなくなって、下品で卑しいとんだ阿婆擦れだ」

あの女というのは祖母のことだろうが、生憎悠菜に祖母の記憶はほとんどない。

幼いころに亡くなった、詳しい理由を両親は教えてくれなかったが、どうやら病を患っていたらしい。

「他人の欠点を探すのがお上手なようですが、生憎私はそれに付き合う気がないのでさっさと話を進めてもらえませんか？」

片足を組んで背もたれに寄りかかりさらに肘も乗つけて頬杖をついた。

我ながら相手を馬鹿にする態度としては完璧だと思う。

その証拠に目の前の当主は完璧に怒りをあらわにしたし、背後に控えていた篠原は完全に顔を逸らし、その部下たちに至っては今にも悠菜に殴りかからん勢いだ。

感情を表に出すとは部下の教育がなっていないよと篠原にせせら笑った視線を送ってやるが、こっちを見る気がないらしい。

この中では一番正しい反応と言えるだろうか。

「人を馬鹿にしおって小娘が、そのうちそんな態度すらとれない状況にしてやる」

「まるで映画の悪役のセリフだね」

その一言に完全にキレたのか当主が席を立った。

「もういい、用件だけいう。見合いは明後日だ、我々に恥をかかせたらお前の両親共々路頭に迷わせてやるからな」

地位を持った連中の考えることは皆一緒だと、部屋から去っていくその背中を見ながら思った。

それでも言っただけには実行するだけの富も権力も持っているに違

いないだろうから、見合いの日くらいは大人しくしてやろうと思う。こっちとしても家族そろって路頭に迷うことだけは避けたい。

ていうか、どこまでも腐りきった世界に踏み込む前から嫌気が指していた。

この家についた瞬間から感じていた皆の視線。

それは決して悠菜を歓迎しているものではなかった、上から下までそれは一緒に、世話をしてくれる女中さんも悠菜に対する態度はそっけないどころか本当はやりたくないというのが見え見えだ。

正直ここまで露骨に態度に表わされると怒る気力も失せる。

来た当初はわざと出されたご飯を食べるものの散らかしたり皿を割ったりした、我ながら大人げないと思うが、この息苦しい空間でのストレス解消にはもってこいだった。

その反撃のつもりなのか一回自宅から持ってきた服をボロボロにされた、それも気に入ってたやつ。

さすがにキレて暴力まがいに脅してやったら、それ以降部屋にくる回数が極端に減った。

3度の食事もドアのすぐそばの床の上に犬の餌のようにおかれるだけで、酷いときには食事が出ないこともある。

だがそれ以外は、風呂もトイレも掃除用具も洗濯機も必要なものは全部部屋に備え付けてある。

唯一娯楽が無いのが苦しい。

暇だった。

寝るか料理以外の家事をするかしかがやることがない。

そうするとどうしても悠菜は最終的にものに当たりたくなった。

窓ガラスは殴ってヒビが入ってるし、そのとき怪我をしたので血もついている。

壁もところどころ凹んでおり、さっき座っていたソファも表面に穴があいて中身が飛び出ている。

当主が最初にそれを見たときの顔は今思い出しても笑える。

「ああでもこれ以上もの壊しても自分の居住空間が残念になるだけだしなあ……きつと奴らはいや絶対に修理してくれない。いつそのこと居住不可能まで壊してみるか？いや逆に面白がってそのまま放置されそうだな……」

どうにかして連中の鼻を明かしてやりたいが、方法が無い。つまりなかった。

そして寂しかった、自分を受け入れてくれない住み慣れない部屋にずっと一人で居続けるのは苦痛以外の何物でもない。

「帰りたい」

決して広いとは言えず、住みやすいとも言えなかった自宅だが、一人ではなかった。

どこか気弱な父、しっかり者で優しい母。

生意気で不良な娘である悠菜をどこまでも愛してくれた。

この理不尽な環境はいつまで続くのだろうか。

それを考えると死にたくなった。

時を同じくして、とある邸宅の一室。

二人の少年が思い思いの方法で寛いでいた。

「お前、あの女に会ったか？」

顔の整った少年が目の前で寝転んで本を読んでいる少年に問いかけた。

その問いに本から顔をあげた少年も負けず劣らずの顔をしていた。

「あの女？ああ、篠原が連れてきた親父の弟の娘か。いや会ってないよ、何で？」

本を閉じ居住まいを正した久瀬直樹は目の前の少年・藤森隆也に向き直る。

「仮にも見合いするのに相手がどういう奴なのか知っておきたい」

真剣なのかどうでもいいのか分からない声と表情の隆也に、明らかにその話題に興味なさげな直樹はめんどくさそうに口を開いた。

「篠原が言うには女のくせにやたら喧嘩慣れしてて、ついでに口も悪けりや性格も歪んでるってよ。手伝いの女に暴力振るったらしくて、今じゃ食事以外誰も近寄らないらしい。貧乏くじ引いたな」

人から伝え聞いたことを言う。

どこまで事実なのかは知らないが、偶々その女がいる部屋の側を通りかかったとき、血が付いてヒビの入った窓ガラスを見たとき、多分全て真実なんだろうなと漠然と感じた。

「こりゃ話のネタにしかないな。それで顔は？」

「知らん、ていつか分からん。話から想像するにゴリラだな」

正直窓ガラスを見た瞬間にどんなゴリラ女が出てくるのかと思うと身の毛がよだつ。

きつとかなり酷い醜女には違いない。

「…………お前使えないな」

「うるせえよ。俺はあんな女に興味は無い。親父も呆れる下品な女、自分の従兄弟って誰でも吐き気がする」

これは事実だ。

自分の父親がお世辞にも品の良い人間だとは思っていない、その親

父が呆れるのだからかなり酷いのだろう。

あの普段何事にも動じない篠原ですらそういう評価をしている。
直樹は目の前の幼馴染みに同情の眼を向けた。

「ホントお前可哀想だよ」

「全くだ。親父同士の勝手な約束に巻き込まれたあげく、あてがわれたのがゴリラ女？何でお前女に生れなかったんだよ」

「そこまで言うなら今から既成事実でも作るか？」

そういつてにじり寄ってくる直樹を隆也は無言で押しのけた。

「馬鹿言え……」

いくら顔が綺麗だと言っても男だけはごめんこうむる。

この幼馴染みは時々冗談なのか本気なのか分からない行動をしてくる、それもかなり迷惑な方向に。

「まああれだ、仮に酷いゴリラ女が出てきたとしても世間体があるから、万が一はないだろ。俺の親父もお前の親父も拘ってるのは見合いの約束だけだ。て言うかお前がさっさと特定の女を作らないのがいけないんだろ」

「だつてうぜえ……」

隆也はもちろんモテル。

だから今までに何人も付き合ってきたのだが、ちょっと気を使ってやるとすぐ調子に乗ってくるのがめんどくさかった。

だから、付き合っても長くもって一か月。

短いときは1時間つてもあった。

そんなこんなでもういいやってなり現在はフリーだ、ただし遊んでる女は何人かいるが。

「どっかにめんどくさくない可愛い女の子落ちてないかなあ……」

「世の中そんなに都合良くいくわけないだろ」

「だよなあ」

二人して同時にため息をつく。

「……お前さあ、見合いの日同席しろよ」

「なんでだよ」

「俺だけゴリラに対面でダメージを追うなんて不平等だ」

「不平等じゃねえよ、俺なんて従兄弟がゴリラなんだぞ。俺のほうが可哀想だ」

「馬鹿野郎、良く考えてみる。もし何かの間違いで伴侶になったら一生ゴリラと一緒に生活しなきゃいけないくなるんだぞ。それこそ親族以前の問題だ」

「いい話のネタになるじゃないか。奥さんゴリラなんてそうそうある話じゃないぞ、誇れよ」

「誇れねえよ！！その話のどこに誇る要素があるんだよ。話のネタか、ネタ的な意味で誇れってか？全く嬉しくねえ、寧ろ死んだほうがマシだ」

自分たちの勝手な想像でダメージを受ける二人。
馬鹿だ。

「まあ分かったよ。幼馴染みの好だ、親父に頼んで見合いに同席してやるよ。そして背後からエールを送ってやる。『きゃあ隆也くん、ゴリラに負けずに頑張ってえ！！』」
「うぜえ」

女性の声音の真似をする直樹の顔面を殴りたい衝動に駆られた。

二人がそんなアホ話で盛り上がっている頃、勝手にゴリラ女に決めつけられた悠菜が盛大なくしゃみをしたのは言っまでもない。

第三話

見合い当日。

久瀬邸の和室で悠菜は着物を着て正座していた。かれこれ30分はこの状態である、そろそろ足が限界だった。

「たくつ、女の子を待たせるんじゃないっつーの」

諦めて痺れた足を崩し立てたり伸ばしたりを繰り返した。

ついでに前屈もやる。

なんか気分がのってきた。

軟禁中運動をするなんてことが無かったから体が凝り固まってしょうがない。

立ちあがりと窓を外を向いてラジオ体操を始める。

これでも小学校の朝のラジオ体操は6年皆勤なのだ、曲が無くても体が覚えている。

そして大きく腕を伸ばし体を左に伸ばした時、突然背後の襖が勢いよく開いた。

ん？と悠菜は背後を向いて動きが止まる。

『うおっイケメン!!』

腕を上げ体を横に伸ばした状態で背後を向く悠菜を見て完全に動きを止めた隆也を不審に思い、直樹が隆也を押しつけてまた動きを止めた。

息子たちの行動を不審に思った父親がその背後から中を覗くと、一人は呆れ、一人は怒りをあらわにした。

「小娘、大人しくしていると云っただろっが!!」

あらわれた久瀬当主に悠菜はムツとする。

女の子を待たせておいて、さらに何の挨拶もなしに部屋に入ってきて、その言いがかりはないだろう。

せめて一言くらい言えば悠菜も大人しく居住まいを正す時間が出た。

だがここで食ってかかったところで損害は出ても利益は出ないので、すいませんと一言謝ると大人しくもといった場所に座った。

それを見た久瀬当主が驚いた顔をするが見なかったことにする。

「ああまあ座ってくれ」

悠菜の隣に久瀬当主・直弘が座り、その後ろに少年が一人。目の前にさっきのイケメンが座ってその隣に父親が座った。

「こちらが弟の娘の笹原悠菜だ」

「笹原悠菜です。ようこそお越しくださいました、本日はよろしくお願ひいたします」

行儀よく手についてお辞儀をする。

我ながらなかなかだと思う。

「藤森隆也だ」

それっきり口を閉じて喋らない。

悠菜はこの時点であ嫌われてるなと判断した、そっちのほう都合が良い。

第一印象はイケメンだが、それからの雰囲気ですわかな時間だったがいけすかない奴だと判断した。

昔からこういう感だけはやたらと当たる。

沈黙してしまい気まずい空気が漂ったが、隆也の父親が口を開いた。

「私は藤森家当主の藤森亮介だ、息子が世話になる」
「こちらこそお願いします」

口ではそう言ったものの絶対に嫌だと思った。

その後は亮介から質問を受けるだけ受けるといった形で、何ごともなく名前だけの見合いが終わった。

悠菜はすぐに寝転がった。

正直退屈だった。

だがこれで家に帰れると思うと気が晴れる。

悠菜はルンルン気分で立ちあがると、和室から出ようと襖に手をかけようとしたが、先に襖が開いた。

篠原が立っている。

「何か用？」

「貴女にはこの家にいてもらいます」

「……はあ？家に帰してくれんじゃないの！？」

「その予定でしたが、相手の父親が残念ながら貴女を気に入りましたので、藤ヶ瀬学園への転入が決定致しました」

「ふざけんじゃないよ、理不尽にもほどがあるだろ！！」

「決定事項です」

そういつてピシャリと閉じられた襖を悠菜はおもいつき殴った。
バキツと音がして拳が貫通する。。

そこから篠原のため息が聞こえてきた。

「あたしは納得してない」

「両親が路頭に迷っても？」

「うっ……」

それを言われると悠菜は抵抗する手段が無くなってしまふ。
卑怯だ。

悠菜が何も出来ないのを知っててそういうことを言う。
襖から拳を引き抜くと、襖を開けた。

「分かりました、言われたとおりにすればいいんでしょ」

ドストスと音を立てて篠原の前を通り過ぎると、悠菜は与えられた
自室に引きこもった。

翌日から久瀬に恥をかかせないようにと徹底的に色々なことを叩き
こまれた。

そこまでレベルの高い高校に通っていたわけではないので、悠菜の
成績は藤ヶ瀬でやっていくには少々難がある。

朝6時に起きてお昼まで勉強して、午後から礼儀作法を倣って、夜
にまた勉強。

そんな毎日が続いた。

全てに篠原の監視が付き、余計な抵抗をすると手痛い仕打ちが待っ
ている。

主にご飯抜きで次の勉強とかそんなのだ。

これが精神的にかなりくる。

だが文句を言うのも癪なので意地でも根を上げなかった。

向こうとしてはおそらく悠菜を徹底的に追い詰めることで抵抗する
気力を失くさせる気なのだろう、その判断は結果的には正解だった。
夏休み終了まで3週間ほどのことだったが、悠菜にはそれが3年間
のように感じていた。

「うつげえ……最悪」

鏡の前に立ち、新しい制服に身を包んだ自分を見て悠菜は毒を吐い

た。

実感として湧かなかった転入と言う事実が、制服を着たことで突如沸いてきたのだ。

制服のデザイン自体は可愛いと思う、これは純粋な意見だ。

だが子息令嬢が通う藤ヶ瀬学園の制服だと思つと吐き気を催す。

『制服』という単語だけならなんてことはないのに、それがどこに所属するものなのかで感じ方が180度変わってしまう。

制服とは不思議なものだ。

「ああ鬱だ、超鬱だ。絶対育ちとかで差別してくるんだぜ、何でもな目に遭わなきゃいけないんだよ。元はと言えばあのイケメンがさつさと彼女作らないのが悪いんだ、イケメンのくせになんで彼女の一人や二人がいらないんだよ、くそっ……一人くらい作れっつての」

イライラして足元にあったゴミ箱を蹴つ飛ばすと、ゴミをばら撒きながら綺麗に弧を描いて壁にぶつかった。

悠菜の蹴ったところが変形している。

この3週間で悠菜の部屋は見るも無残な姿に変わり果てていた。それも全て悠菜が誰にもぶつけられない色々な物を全てこの部屋の中にぶつけていたからだ。

ソファはもう完全に中身が出ていたし、壁もいたるところに穴があき、床も窪んで、窓ガラスは完全に風が吹き抜けていた。

夏だったので夜に寒くて風邪をひくということは無い。

逆に暑くて寝苦しいときは何度かあったが。悠菜は夏休み中に体重が4キロも落ちていた、ちょっと健康状態が心配だ。

「時間です。外でお待ちしております」

篠原がドアのそこから呼びかけた。

適当に返事をし真新しい鞆を肩に持ち外に出ると、目の前に黒塗りの高級車が止まっていた。

運転席には篠原が座っている。

助手席に座るべきか、後部座席に座るべきか悩んだが、結局助手席のドアに手を駆けて乗り込んだ。

「後ろに座らないのですか？」

「別にあたしは良家の令嬢じゃない」

シートベルトをしながらそっけなく返答すると、そうですかとまたそっけなく返答された。

車が発進する。

「そっぴゃ、坊ちゃんは一緒じゃないのか？」

「坊ちゃん？あぁ、直樹さま先に登校されました」

直樹という名前を聞いて、当主の息子の名前を聞いていなかったことを思い出した。

「ふーん」

大方、下品な女とは登校出来ないとかそんな理由だろう。

別にこっちも慣れ合うつもりはないのでどうでもいい。

それよりもこれからどうやって残りの高校生活を送るかを考えていた。

なるべく目立たないように過ごすのがいいのだろうか、果たして出来るだろうか。

無理だな。

即座に自分で否定した。

それよりも高校卒業後が心配だ。

他大学にいくのか、それとも強制的に内部進学させられるのか、どこか適当な所に就職させられるのか。

3番目だけは絶対に嫌だ。

出来れば大学までは行っておきたい。

「残りの2年半は寮で生活して頂きます。その件について直弘さまから言付けを」

「ああ別にいいよ、どうせ帰ってくるなとかそんなんでしょ」

篠原が口を噤んだのでどうやら正解らしい。

悠菜は腹の中でクックと笑った。

頼まれたって帰るものか。

「ああそれと、先にこれを渡しておきます」

そういつて手渡されたのは通帳だった。

「毎月2万つつ振り込まれます、生活費です」

「……………」

1か月の生活費が2万っていうのはいくらなんでも少なすぎやしないだろうか。

いくら高校生と言ったって、せめて4万くらいは欲しい、がそんなことを言ったところで要求は通らないだろう。

ああ私って不幸な少女。

と自分で考えて泣けてきた。

ポジティブにいかうか。

そうこう考えているうちにいつの間にか到着したようだった。

そこは広大な敷地を高い壁で囲まれ、中も外も木が覆い茂っていた。車から降りると、メガネをかけた壮年の女性が出迎えた。

「貴女が笹原悠菜さんね」

「はい」

「こつちよついてきて」

後ろを振り返ると、篠原は無言で車を発進させた。

もつとこう余韻というものを考えてくれないだろうか。

「私はこの学園の学長九条けい子、幼稚部から大学まで全ての学長をしているわ」

林道を突き進むと6階建ての2棟の建物が姿を現した。

「右が女子寮、左が男子寮。お互いの寮に入ることは硬く禁止されているから覚えておいて」

『頼まれたって入らねえよ』

「貴女の部屋は3階の335号室よ」

『逃げるのに中途半端過ぎる……』

それからその2棟の間を抜けさらに奥に進んでいくと、やっと高校の校舎が見えた。

校舎前に男性職員と思われる人物が立っている。

「宇野先生、こちらが笹原さんです。笹原さん、貴女のクラスの担任の宇野先生です」

「笹原です、よろしくお願いします」

「ああよろしく」

手を差し出してきたが、悠菜は手を出さなかった。少しさびしい顔をされる。

「それでは後のことは任せましたよ」

「はいはい、了解りようかい」

良く言えばフランク、悪く言えば適当な教師だと思った。

「悠菜ちゃんが入るのはA組ね、色々とキャラの濃い奴が集まってるが仲良くしてやってくれ。最初は軽く自己紹介してもらおうから。それと俺は俺の中で平等に接するつもりだから」

つまり傍から見たら不平等なんだろうか。

お先真っ暗だ。

第四話

「笹原悠菜です」

教室で自己紹介を試してみたのはいいものの、予想していた通りクラスメイトからの反応はあまり宜しくなかった。

藤森隆也との見合い話が伝わっているのか、女子の一部からは明らかに嫌悪の目を向けられその他は好奇心だったり、蔑んだ目だったり。

予想の範囲内なので別に悠菜自身は何とも思わないのだが、それでもやっぱり嫌われるよりは好かれたほうが断然良い。

その後先生の提案でクラスメイトが自己紹介をしてくれたが、大して興味が無い悠菜はほとんど覚えられなかった。

だから支持を受けて座った窓際一番後ろの席で、前に座っている人間に話しかけられて最初に聞いたのがその人の名前だった。

「丹波志保です」

前髪を下ろしメガネをかけた大人しそうな少女だ。

「あのっ、席近いからよろしくね」

「よろしく」

返答すると恥ずかしそうにはにかんだ、その志保の笑顔が思いのほか可愛らしい。

色々顔を隠しているのが勿体無いと思い、不躰に志保の顔に手を伸ばすと前髪をあげた。

悠菜の突然の行動にビックリして体を強張らせる。

「美人じゃん。何で顔隠してんの？」

そのまま自分の髪を押さえていたヘアピンをとり、前髪を止めてやるとキョトンとした顔をして悠菜の顔を見た。

「そっちのほうが可愛いよ」

何を言われているのか分からなかったのか志保はヘアピンに手をやり、理解するとみるみるうちに顔が赤面していった。

その様子がおかしくて笑うと、さらに赤くなって急いでヘアピンをとってまた元に戻してしまった。

とったヘアピンを悠菜に俯いたまま押し返す。

可愛いのにと愚痴を言いながらそれを言うと、志保は無言で前に向き直ってしまった。

どうしようもなくシャイなようだ。

とりあえず彼女は自分に対して他の連中が持っている嫌悪感とかそういういたものを持っていないことは確認出来たので、それだけでも良い収穫だ。

高校時代の肩書が『友達いないぜ！』ってのだけは避けられそうな状況に内心安堵した。

今日は始業式だったので授業は無い。

午前中で全てが終わってしまったので、悠菜はこれからどうしようかと考えていると視界にチマチマとした動きをしている志保が入ってきた。

「何してんの？」

「ほえっ！？」

びっくりして振り返ってくる志保に小動物的な何かを感じる。
すっごく抱きしめたい。

「お昼をどうしようかと」

「ああお昼ね、そういやアタシもどうしょ。ねえ紹介ついでに一緒に食べようよ」

折角仲良くなれそうなのだ。

すると志保はやたらオロオロし始めた。

「えっ、あのっ、いいんですか？」

「志保ちゃんがいいなら別にいいけど、いや？」

「いつ嫌じゃないです、ご一緒させて下さい！！」

なんか状況的に悠菜が脅してるような感じに見えなくもないが、嬉しそうにする志保を見てそんなことは吹っ飛んだ。

志保がのんびりと、しかし本人にとっては全力で帰り仕度をしているとき、教室の入り口が騒がしくなった。

見ると、女子何人かが輪になり誰かを囲んでいる。

藤森隆也と久瀬直樹だ。

「笹原さんは久世君の従兄弟で藤森君とお見合いしたんですね？」

「ああやっぱりそういう話伝わってるんだ、とても不本意だけどね。本人が言いふらしたの？」

「はい、朝礼前に藤森君と久世君が皆に話してたんです『顔はゴリラじゃなくて良かった』って」

悠菜の中で何かがキレた。

「それで、最初はお会いするのが怖くて、しかも空いてる席が私の後ろしかないし……。でも優しい方だったので安心しました」

凄い笑顔で言われて反応に困ってしまった。

出来れば今すぐにでも奴らを殴ってやりたいが、こんなに嬉しそうな志保の前でそれをやるのは気が引ける。

引き攣った笑みを浮かべるしかなかった。

しかし放課後だと言うのに転校生の自分に誰も興味を示さないのがまた面白い。

「笹原さんも藤森君もお互いに興味が無いことを知っているからだと思います、それでだと……」

「ああそういうことね」

要するに今の悠菜に媚を売ったところで何も利益は無いと判断されたわけだ、媚びてくる奴はこっちから願い下げなのでそこら辺は利害が一致したということだ。

「確かにアタシは興味無いし出来れば関わりたくないし、お腹も空いたし初日で知らないことも多いし、ってことでさっさと行こうか」
「はい」

教室から出るときチラッとだけその集団を見た。

本人の顔のレベルが高ければ、集まっている女子のレベルも高かった。

本当にあの中からさっさと彼女を作ってくれることを切に願う。

高校の学食は教室から少し離れた建物にあった、中ではすでにたくさん生徒が昼食をとっている。

「ほげえ、凄い人だね」

「私は使わないので知らなかったのですが、確かにたくさんいますね」

「何で使わないの？」

「人が多いところが苦手で」

「ああうん、分かる。そんな感じるもん。それで寮での食事は？」

「8時まで開いてるのでここで食べるか、自室で食べるかのどちらかですね」

「志保ちゃんは自分で料理するの？」

「少しだけですけど」

そういう志保はさっきから下を向いてモジモジして落ち着きがなかった。

チラチラと入り口を気にしている。

「ここで食べるのいや？」

志保がパツと顔を上げた。

図星だったらしくオタオタし始めた。

「じゃあさ、ここで食べるの止めるから志保ちゃん何か作ってよ」

「ほえっ！！」

どう返答するべきか迷っている志保の手を掴むと、悠菜は問答無用と学食から出ると寮に向かって歩き出した。

後ろから志保が小走りでついてくる。

「あのっ、私大したものは作れませんよ」

「ああ大丈夫、何も期待してないから」

言ってからちよつと今のは無いかないと思ひ、謝ろつと後ろを向くと志保がキョトンとしていた。

どうして突然立ち止まったのかという表情だ。

「自分で今何言われたのか分かってる？」
「えっ？」

本気で分からないという顔だ。
思わずため息が出てしまった。

悠菜の様子に志保が慌てたので何でもないと誤魔化した。
鈍感というわけではないのだろうが、何かが引つ掛かる。
それから急ぐこともないかとゆっくりと志保に合わせて歩くと、
男子寮の入り口で何人かの男子がたむろしているのが見えた。
何事かと思ったが無視して通り過ぎようとする。

「丹波じゃないか。なににお前友達が出来たの？」

悠菜たちに気付いた男子の一人が声を駆けてきた。
決して友好的ではないことはすぐに分かる口調、志保は悠菜の後ろ
に隠れるようにして怯えだした。

「ウチのクラスの転校生の」
「ああ噂のゴリラ女か。お前も残念だな、まともな友達が出来ない
からって藤森のゴリラ女に手をだすことっ」

気付いたらその男子にラリアットを食らわせていた。
見事なまでに地面に激突して沈黙する。
それをみた周りの男子が息を飲んだ。

「どんな噂が流れてるのか知らないけど、少なくともゴリラ女は当
たってるかもよ」

ニヤニヤしながら拳をパキパキ言わせるとその場にいた男子が後ず
さりした。

悠菜は手近にいた男子の胸倉掴むとそのまま引き倒し、その背中を踏みつぶした。

「てめえ女のくせに」

「やめなよ、そういう負けフラグ自分から立てるの」

完全に見下した目でみると、挑発に乗った男子が襲いかかってきた。まず最初の男子の顔面を殴り飛ばす。

その流れで右から来た男子に左足で回し蹴り。

さらに左から来た男子を回転の勢いで殴り飛ばす。

最期に残った奴にアッパーを入れると、最後に立っていたのは悠菜だけになった。

ちよつと満足する。

「さて行こうか」

呆氣にとられている志保の手を取り女子寮に向かった。

志保の部屋に着いてから甲斐甲斐しく料理を شدした。

制服にエプロン姿の部屋主の背中を見ていると、新妻を眺めている気分だ。

出来あがった料理を見て思わずため息が出る。

「あつあの、お気に召しませんでしたか？」

「違うよ、そんなわけないじゃん。えっだって同い年だよね、なのにこんなに料理できるの？ 凄いじゃん、アタシじゃ絶対無理」

志保の作った料亭紛いの昼食に感激して悠菜は遠慮を忘れてガツガツと食べた。

それを嬉しそうに眺めながらチマチマと食べる志保の分も奪いかなない勢いだ。

ものの15分で皿の上の料理は綺麗に無くなった、結局私の分もどうぞという志保の分も遠慮なく頂いた。

お皿を片付けに戻った志保を床の上でグデツとしながら待つ。

「笹原さんは喧嘩が強いんですね」

エプロンを外し、志保は寝転ぶ悠菜の隣に座った。

「あんまり嬉しくない。……中学がかなりの不良校で毎日殴り合いの喧嘩でさ、高校入ってから数回は減ったけど喧嘩売ってくる奴がいて、無視するとかそういう大人の対応が出来なくて」

「怖くはないんですか？暴力を振ることも振られることも」

「最初は怖かったよ。でも助けてくれる人間なんていなかったから自分でなんとかするしかなかった、そのうち怖いとかそういうのは感じなくなった」

「強いんですね」

「そうでもないよ、久瀬んとこの執事のおっさんには結局勝てなかったし。それに本当に強い奴はむやみに暴力を振るったりはしない……アタシの中高で仲のいい子に口が上手い奴がいてさ、殴り合いになるまえに口だけで相手の戦意を喪失させるんだよ。その子自身がドSなのもあって見事でさ、アタシの憧れで目標」

拳を作つて言うと、志保がクスクスと笑い始めた。

「ねえちよっと、そこ笑うところじゃない!!」

「ごめんなさい。でも笹原さんが口も上手くなったら最強だなんて思つて」

「それ男なら喜ぶかもしれないけど、アタシはこれでも女の子だよ!!嬉しくないって」

それでも笑うことを止めない志保。

悠菜は諦めて気が済むまで笑わせてあげることにした。

志保が落ちつき、その後雑談をしていると、突然部屋のチャイムが鳴った。

すぐに志保が反応して外に出て対応していると、悠菜が呼ばれた。

何事かと思つて出てみると、寮長だと名乗る女性だ。

どうやらしたで宇野先生が呼んでいるらしい。

志保にはそこで分かれ寮長に案内されて玄関に出ると、宇野先生の他にも3人の先生と思われる人が険しい顔つきで立っていた。

「何ですか？」

悠菜が半分めんどくさいの隠しもせず聞くと、宇野先生が喋ろうとするのを遮つて中年で小太りの女性の先生がヒステリックな声をあげた。

「貴女転入初日から暴力沙汰を起こすなんて、何様のつもりですの！？この学園始まって以来のことですわ。まさかこんなお下品な子が入学してくるなんて、私には信じられませんわ」

「ああそのことですか」

「まあ、貴女自分がどれだけのことを」

「はいはいちょっと落ち着いてください霧島先生」

「落ち着いていただけますか、私のクラスの生徒が被害者なんですよ！！」

めんどくさい教師に絡まれたなと内心でため息をついた。

というか、さつき殴ったときに悠菜自身はかなり手加減をしていたため、普通の人間なら5分もしないで立ちあがれる。

そんなにか弱い坊ちゃんだったのだろうか。

見た感じそんな風には見えなかったが。

「笹原、とりあえず生徒指導室に来てくれないか？話はそこで聞こう」

「聞く必要なんてありませんわ、即刻退学にすべきです。学校の風紀を乱されては堪りません！！」

「別にアタシはここで退学にしてくれてもいいですよ、寧ろそれを希望します」

「悪いがそれは出来ない」

残りの二人の先生が喚く霧島を引きずりながら校舎に連れて行くのを横目で見ながら舌打ちした。

「この学校を運営しているのは藤森と久瀬だ。言いたいことは分かるな？」

「…………どこまでも縛りやがって」

呟くと宇野が分かったのか？ともう一度聞いてきた。

「大人しくしてますよ、相手が絡んでこなければね」

そう吐き捨てると、呼びとめる宇野を無視して悠菜は学校の敷地から続く森の中に入ってしまった。

第四話（後書き）

.....あれっ、これ恋愛小説だよね？

第五話

適当な木に登ると、枝に座り幹に寄りかかった。
一気に疲れた。

学校の運営を藤森と久瀬が行っているということは、おそらく久瀬
本家に悠菜の行動は筒抜けだろう。

下手なことをすれば両親が路頭に迷う。

宇野が言いたいのはこういうことなのだろう。

「めんどくせえ」

今回は志保のことで絡まれたが、これを餌にまた絡まれるかもしれない。

はつきり言って自分をどこまで抑えることが出来るのか自身が無い。
一方的にやられっぱなしなのは我慢出来ない。

「めんどくさい」

もう一度呟いた。

初秋の風が頬を撫でた。

まだ暑いこの季節だが木の葉から洩れる日の光は丁度いいくらいだ。
昼寝には丁度いいと思った。

うとうとし始めてくる。

この時期なら風邪を引くことも無いだろう。
そう考えて本格的に寝ようとしたところ

「何してんだよ」

下かけられた。

覗くと今会いたくない人間のうちの一人、藤森隆也が立っていた。

「それはこっちのセリフだよ。放課後デートに行ってたんじゃないの？」

「お前頭大丈夫か？」

「病院に行くほどじゃないよ、眠いからあっち行って」

顔を背け寝る態勢に入る。

無視を決め込むと、無視できない一言が放たれた。

「暴力事件起こしたんだって、ゴリラ女」

その言葉に反応して顔を向けるとニヤニヤとこちらを見ていた。
ウザイ。

「あんたには関係ない」

「ああそうだ、確かに俺には関係ないが、むかつくことに俺の親父がお前のことを気に入ってるんだよ」

「ふーん、じゃあ他に彼女でも作れば」

「女はめんどくさい」

「アタシも女なんだけど」

「何だ、お前自覚あったのか」

殴ってもいいだろうか。

一瞬そんな疑問が頭を過ぎった。

「ああもうあんたウザイ。関わるつもりは無いからあっち行ってって言うってんじゃない」

「ここら辺は元々俺の逃げ場なんだよ、勝手に上がり込んだのはお前のほうだ」

「それは残念だったね」

このままだと眠れない。

仕方なくこちらが折れて部屋で寝ようと思い態勢を変えた時だった。

「あつー！」

足を滑らせた。

まさかの失敗に思考が追いつかず、いつもならとれる受け身がとれなかった。

慌てて藁にも縋る思いで木に手を伸ばすが、届かずそのまま落ちた。だが地面の感触の代わりに、他の感触が悠菜の激突の衝動を防ぐ。

「ちょっとアンタ何やってんのー！」

悠菜の下で受け止めきれず完全にマットになってしまい痛みを堪える隆也を見下ろす。

『うわあ、やっぱり近くで見てもイケメンはイケメンだわ』

思わずその綺麗な肌に手を伸ばしてしまった。

見た目以上の柔らかさで気持ちが良い。

しばらく手のひらでその感触を楽しんでいると

「お前が何やってるんだよ、さっさと降りろー！」

言われて悠菜は我に返り慌てて飛び退く、今の態勢だとどうみても悠菜が隆也を襲っているようにしか見えない。

それから自分のやったことを思い出して、顔が熱くなるのが分かった。

「人の顔触るの癖なのか？」
「はっ？」

突然で何を言われたのか分からなかった。

「丹波の顔も何も言わずに触ってただろ、前髪だったけど」
「笑顔が可愛かったから、つい……。アンタも男のくせに肌綺麗だなあって思ったら手が出た」

「変態か、お前」

「ふざげるな、なんでそこで変態になるの！！」

「変態じゃなかったらなんだよ、痴漢か？女だから痴女か」

一瞬拳を握って体がピクツと反応したが、先程宇野に言われたことを思い出して踏みとどまる。
その変わりこめかみに青筋を立てて引き攣った笑みを浮かべることになった。

「アンタウザイよ！！さつさと彼女でも作ってよ」

「何でそこでないこと前提で俺の彼女の話になるんだよ」

「アンタに特定の女がいないからアタシに見合い話が来るんでしょが、本当だったら今頃前の高校でウハウハな青春ライフを送ってたはずなのに」

そのはずだった。

ちよつと暴力的だが悠菜はこれでも今時の高校生なのだ。

悠菜の好みで髪は染めてはいないが、周りの子と同じように恋愛もするし、片思いだったが好きなのもいた。

それをよりにも寄って大人の勝手な事情でそれを全て奪われて、おまけに居場所まで無くなってしまうた。

理不尽過ぎて怒りが込み上げてくる。

「女はめんどくさい」

隆也が呟くように言った。

「アンタに甲斐性がないからじゃないの？」

「んなわけないだろ。女はちよつと優しくしてやるとすぐ勘違いする、俺は女のステータスを現すアクセサリじゃない」

「ふーん、モテる奴はモテる奴なりの苦勞があるってことね、こんちくしょう」

相手にどんな言い分があろうと悠菜には悠菜の立場という者がある。それでもちよつとは同情というものが沸いた。

「まあほら、今はまだ学生でガキだし、大人になったら考え方も変わるし世界も広がっていい人が出てくるよ。そしたらさ、その人を大事にしたらいいいじゃん。学生たるもの勉強が仕事であって恋愛は二の次だし」

どの口が言っんだと自分で思ったが今は棚に上げておこつ。

「10年の辛抱じゃん。15年は生きてんでしょ、大丈夫だってあつという間だよ。あつそれともそれも我慢できないほど甘えっ子だった？」

「うぜえ」

なんか凄い目で睨まれたが気にしたら負けだと思つ。

「アンタはアタシと違って行動に制限が無いんだから好きにしたら

いいじゃん。今度寂しさ防止にぬいぐるみでもあげるよ、じゃあ頑張れ」

親しみとその他邪なことをこめて隆也の肩を叩くと、じゃあねと後ろ手に手を振ってその場を去った。

「変な女」

呟いた隆也の声が悠菜の耳に入るはずが無い。

それから無意識にさつき触られた頬を手が撫でていることに気が付く、しばらくすると隆也は壊れたように笑い出した。

寮に帰った悠菜を玄関先で待っていたのは志保だ。心配そうにして悠菜を見つけると駆け寄ってくる。

「大丈夫でしたか？」

「特に何も無かったよ、そのあと森で昼寝でもしようと思ったら邪魔が入って戻ってきた」

「そうだったんですか、あつこれ部屋に置いていった荷物です」

志保から学生鞆を受け取り、そのまま二人は悠菜の部屋に直行した。部屋に入ると玄関わきに鍵が置いてあり、さらに奥に入ると段ボールが数箱置いてあった。

中を開けると悠菜の荷物と食べ物だった。

両親が送ってくれたらしい。

「優しいお父様とお母様ですね」

「そいつらのせいでアタシの青春は無茶苦茶なんだけどね」

聞いているのか聞いていないのか分からない反応をした志保は、ある一つの段ボールを開けるとあつと声を出した。

取り出したのは大きな犬のぬいぐるみだ。

「可愛いぬいぐるみさんですね」

「それ小さいときに貰ったんだ、お気に入りです。………そっか入
れてくれたんだ」

志保からぬいぐるみを受け取るとシゲシゲと眺める。

昔祖母の葬式の日、訳も分からず泣きじゃくっていた。

死が理解出来なくて何で動かないのか色々な人に聞いて、そして
それを両親に怒られてもう会えないと言われた。

そしたら泣いてしまった。

何で泣いたのか自分でも分からない。

泣き止まない悠葉を大人はうつとおしそうにして誰も構ってくれな
かった。

だから余計に泣いた。

誰も構ってくれず挙句に別室に追いやられて泣いていると、突然部
屋の扉が開き誰かがこれ押し付けてきたのだ。

びつくりして泣き止み思わず自分よりも大きなそれに手を伸ばす。

ふかふかとして気持ち良かった。

それをギュッと抱きしめて相手の顔を見ると、自分と同じくらいか
少し上の男の子がいた。

綺麗に顔が整った男の子だ。

ジッと見ていると、一言「あげる」といわれ「ありがとう」と返す
と、その子は扉も閉めずに走り去ってしまった。

そんな短い時間だったが、今でもはっきりと覚えている、男の子の
顔はほとんど忘れたが。

それからずっと今まで寂しいときでも何でも、自室で一人のときは
これを抱きかかえるくせがついてしまった。

さつき隆也にぬいぐるみをあげると言ったのものこった経緯が
あるからである。

「大切なものなんですね」

「うん、そう。アタシが持つてるモノの中で一番大切」

10年経って大分汚くよれよれになってしまったが、それでも今でも一番大切なものだ。

「あのさあ、学校って外に出られないの？」

「そんなことは無いですよ。前日までに外出届を出せば大丈夫です、日用品とかは校内では売ってませんから。必要なものもあるんですか？」

「ぬいぐるみをもう一匹買おうかと思って」

「それじゃあ明後日出かけましょう、丁度学校もお休みですし、さやかですが笹原さんの転入パーティでも開きましょう」

楽しそうに喋る志保を悠菜はギュッと抱き締めた。

第六話

悠菜は部屋で一人買ってきたうさぎのぬいぐるみを抱きかかえて眺めていた。

昨日志保と一緒に買い物に行き、その後本当にささやかだったが楽しかった悠菜の歓迎会。

楽しい時間は何であつたという間に過ぎていくのか。恨めしい。

そして現在、いざ浮かれた気分が現実に戻ってくると、自分のした行動に自己嫌悪するのだった。

「……………なんでうさぎ」

自問自答したかった。

タイムマシンがあるなら買おうとしている自分をいまずぐにでも殴りたい。

大体関わりたくないのにいつ渡せるというのだ。というかその場面を想像すると猛烈に恥ずかしい。

「ばっかじゃないの!」

自分でもよく分からない感情の制御が出来なくてうさぎのぬいぐるみを壁に投げつけた。

バフツと音がしてポトツと落ちる。肩でしばらく呼吸をする。

無残に床の上に転がるうさぎのぬいぐるみ。

慌てて拾うと、枕の横の犬のぬいぐるみの隣にチョコンと並べた。

「ちよつと気分転換でもしよう」

休日は私服で校内を歩くことを許可されている。

悠菜は真っ直ぐ校舎に向かうと、校内をうろつき探検し始めた。まだ来て一週間も経っていない。

知らない場所も多いし、何より自分で歩いたほうが覚えも早い。そして体育館裏に来たとき人の声が聞こえてきた。

近づくにつれその声が荒々しいことがはっきりと分かってくる。

興味半分でそれを陰から覗くと、数人の男女が男子生徒一人を取り囲んでいた。

『いじめ』

すぐに頭の中に浮かんだ。

様子を窺うとその男子は蹴られたり殴られたり男女関係無く暴行されている。

お育ちの良い人間が通うと言ったところで、所詮は今時の親に育てられた今時の高校生。

全てがこうじゃないとしても、やっぱり変わりは無いということだろうか。

「複数でいじめ？」

体が勝手に動いた。

気付けば声をあげ姿を現していた。

「何だお前」

悠菜に気付き動きを止める。

「一人相手にそれはないんじゃないの？」

「俺たちはこの礼儀を知らない可愛い後輩に教育してただけだよ」
「暴力でしか後輩を教育出来ないなんて、見下げた先輩だね。人と
してどうなの？」

「口の減らないお子様ね、貴女も教育してあげましょうか？」

女子生徒の一人の言葉を合図に男子生徒が襲いかかってきた。

殴りかかってくるのをかわすと、膝蹴りを鳩尾に入れ、そのまま顔
面を殴る。

後ろに倒れた男子生徒の頭部付近に立つと、芸も無くただ殴つてき
た男子生徒の踏み込んだ足に乗り肩を首に腕を回すと腕の力だけで
自分の体を持ち上げ、太ももで相手の頭を支えるとそのまま振り返
った。

そのまま倒れた男子の上に投げ飛ばす。

まさかそんなことをされるとは思わなかったのか、周りにいた男子
生徒一人と女子生徒二人の動きが止まる。

だがその一瞬が悠菜に絶好の機会を与えてしまった。

男子生徒の急所を蹴り一撃で沈黙させる。

振り返って女子生徒を見ると完全に怯えていた。

「他人に暴力を振るってことは自分もされることを覚悟してるん
でしょ？」

「ひっ」

「どれだけ痛いかわってる？知らないからこんなことするのか、教
えてあげるよ」

ニタアッと笑うと女子生徒が悲鳴を上げた。

そんなものは雑音にはなっても悠菜を怯ませることは出来ない。
かなり手加減はしたがそれでも十分と言えるほどの力で鳩尾を殴つ
た。

気絶して倒れる。

もう立ち上がったて悠菜に向かってくるものはいなかった。
それを確認すると

「大丈夫？」

呆然と座り込んでいた男子生徒による。

顔とか殴られた跡があり、口元は切れて血が流れていた。

「ひどいことするね」

何で抵抗しなかったとは決して言わない。

したくても出来ないことは悠菜自身がよく分かっていたから。
だから悠菜は代わりに強くなった。

「保健室いこ」

腕を掴んで無理矢理立たせようとする

「ぼっ僕は大丈夫です！！」

突然大声をあげて抵抗した。

「はあ？どうみても大丈夫じゃないでしょうが、それとも頭の病院
に行くのが先？」

「違います、僕は正常だ」

「自分で正常って言っちゃうのもどうかと思うけど、奴らの報復が
怖いとかそういう感じ？」

一瞬の反応。

どうやら凶星みたいだ。

「そんなこと気にしたって意味無いと思うよ。あのままアタシが助けても助けなくてもコイツらが止めるとは思えないし、アンタがやられないようにするしか方法は無いよ。基本的にこういう奴らは頭が可哀想だからね、アンタが変わるしかない。出来ないならまたアタシを呼べばいいし」

黙りこんでしまった相手を今度は有無を言わず立ち上がらせると、保健室に連れていくため引つ張った。

だが行く先でこちらを見て立つ何者かを見つけて動きを止めた。

その何者かはこちらを面白そうに見ている。

新手かと思いきや身構えると

「そんなに警戒しなくていいじゃないか、俺は敵じゃないよ」

ニコニコと血が付いてくる怪しい男に警戒しないほうが難しい。

悠菜が駆けだす態勢にはいると

「高木先輩!!」

殴られた男子生徒が素っ頓狂な声をあげた。

「えっ知り合い？」

驚いて悠菜が聞くと、逆に驚いた顔をされた。

「知らないんですか？高木先輩と言ったら、あの久瀬直樹の従兄妹で校内一の秀才と言われる三年生じゃないですか」

「マジか!!」

あれの従兄弟ということは必然的に悠菜の従兄弟ということに……
はならないか。

もしかしたら母方の従兄弟かもしれないし。
すると悠菜の表情を読んだのか

「父方の従兄妹だよ、母親が久瀬の長女だ。必然的に君の従兄弟にもなる」

「心が読めるの!？」

見透かされたような発言をされ悠菜はもつと驚き、同時に条件反射で敵と見なした。
余計に警戒を強める。

「二人が従兄弟ってことは、じゃあ貴女がゴリラ女で有名笹原悠菜さっ」

「殴るぞ」

ドスの聞いた低い声を出すと、息を飲んだ悲鳴をあげた。

「まあまあそんなに警戒しないでよ、別に俺は悠菜ちゃんの敵になるつもりはないし、今回のことも助けてあげるよ」

「別に助けてもらうことなんか」

「今回の暴力沙汰が本家に伝わったらやばいんじゃないの?」

「……………あああああああああ!!!!!!」

言われて初めて気付き絶叫した。

頭を抱えて唸る、壁に頭を打ちつきたい。

「どうしようどうしようどうしよう」

慌てふためく悠菜に綾人は乾いた笑いを漏らす。
どう見てもその様子は楽しくて仕方が無い感じだ。

「だから助けてあげるって言ったんだよ」

「信用出来ない!!」

「酷い嫌われようだなあ、俺なんかした？」

「あたしのなかで久瀬の人間は無条件で敵とみなす!!」

「それは理不尽だよ」

理不尽と言われようが何と言われようが、悠菜にとってこの学校に
いること自体が理不尽なのだ。

嫌悪感を剥き出しにする悠菜を見て、仕方が無いという笑みを浮か
べると男子生徒のほうに向きなおり、2、3会話したあと悠菜にも
ついてくるように言った。

ここで抵抗したところで何にもならないので大人しくついていく。
保健室になると男子生徒を保険医に任せ、悠菜は綾人に連れられて
いた。

連れてこられたのは生徒会室。

当たり前のように入っていく綾人を訝しげに見ていると中から手招
きをされた。

「別に捕って食べたりしないよ、俺じゃ悠菜ちゃんに勝てる気はし
ないしね。とりあえず適当に座ってよ」

コーヒーか紅茶かと聞かれ紅茶と答えると5分くらいで香り豊かな
美味しい紅茶をいれてくれた。

あまりの美味しさに気が緩んでしまったが、気付くと慌てて引き締
める。

綾人はそれを面白そうに見ていた。

「俺は前生徒会長でね、それでここには出入り自由なんだ。今の生徒会長は2年の女の子だけど、来年の会長は隆也が最有力で、次に直樹って感じかな。俺的に一番なって欲しくないトップ2だけどね」

「自分の従兄弟や幼馴染みに酷いことを言いますね」

「俺は身内だからとかって理由で贖罪したりはしないよ。だってよく考えてみなよ、きつと彼らが生徒会に入ったらまともな運営が出来なくなるよ。そうじゃなくても目立つのに」

「逆にそのほうがある種のまとまりが出来ていいんじゃないですか？」

彼らが注目されている間悠菜に目がいく可能性は限りなく低くなる、そうすると風当たりも弱くなって快適な学生生活を送れるようになるという打算的な考えもある。

第一、悠菜は彼らに興味が無いため何をしようとしても良かった。

「悠菜ちゃんはすっごく優しい子なのに、興味関心が薄いのが残念だよ」

「興味関心が薄いのは認めますが、優しいのは認めませんよ。あたしは他人には優しくない」

「随分と自虐的じゃないか、それでいいなら何も言わないけど」

「それより、本題に入ってくれませんか？」

イライラしながら紅茶を飲み干すと、綾人はとんでもないことを言ってきた。

「そんなものは無いよ」

思わずカップを握っていた手に力がこもる。

じゃあ一体何の用があってこんなところに自分は連れ込まれたというのだ。

「あえて言うならこうやって話すのが目的かな。たまたま悠菜ちゃんが校内を歩いているのを見つけたから後をつけてただけだよ。本家を追い出された叔父の娘の噂を聞いてたからね、興味があったんだ」

「人を珍獣みたいに言わないでください!!」

「言い方が悪かったね。でも君の存在を知って会ってみたかったのは本当だよ、追い出された君の祖母である美恵さんは母や伯父達からの評判は悪くてもそれ以外の人達からの評判は良かったからね」

「あたしが本家に居た時はそんなことは一言も聞きませんでした」「評判が良かったのはあくまで美恵さんの身の回りの世話をしていた人たちだけだったからだよ、その人たちも美恵さんが追い出されると同時に止めさせられたからね」

「ばっかじゃないの!？」

「俺もそう思う」

まさか肯定されるとは思わず拍子抜けてしまった。
ニコニコとしている従兄弟の顔をマジマジとみる。
信用ならない顔だと思った。

「自分の主観だけで物事を判断するのは愚かだよ、伯父達は悠菜ちゃんのことを色々と酷く言ってるみたいだけど、本当の君はそんな人間の筈は無いよ。俺はちゃんと知ってる」

「そんなこと言ってたって、あたしは信用しないから」

半ば自棄になって立ち上がると悠菜は生徒会室から出ていった。
出ていくとき悠菜は自分の顔がちよっと嬉しそだったことには気付かなかった。

第七話

「やあ」

綾人は来訪者に軽く手をあげると笑顔で出迎えた。

「いきなり呼び出して何の用だよ」

「綾兄が俺たちを呼び出すなんて珍しいよね、しかも生徒会室だし」

呼び出された隆也と直樹は当たり前のように目の前のイスにふてぶてしく座ると、出された紅茶に口をつけた。

「誰かいたのか？」

隆也がイスにわずかに残る温かさと使用後と思われるカップを目にして綾人に尋ねる。

「さっきまで悠菜ちゃんがいたんだよ、君たちを呼び出したのは彼女が帰ってから」

「もしかして、俺たちを呼び出したのはあのゴリラ女絡みじゃ」

「女の子にそんなこと言ったらダメだよ」

「質問に答えるよ」

「当たってるよ」

生徒会室に供えられたPCを立ち上げて何かの作業を始めた綾人。隆也と直樹は帰りたい衝動にかられた。

はつきりってあんな女のこと呼び出される謂われは無い。

「帰ってもいいか？」

「落ち着きなよ、彼女のことを嫌いのなのは分かるけど、まずはこっちの話を聞いてから帰った方がいいじゃないか。じゃないと、君たちは紅茶を飲み to 貴重な休日ここまで出張ったことになるよ」

ニコニコと綾人独特の笑顔を向けられ二人はため息をついた。こういう表情をしているときは、大抵良くないことを考えている時だ。

プリンタが起動し数枚の印刷用紙が出てくると、綾人がそれを机の上に広げた。

それは数人の男女の、それもさつき悠菜が殴り倒した生徒についての個人情報だった。

「こいつらがどうかしたのか？」

「手短に話すと、現在彼らは体育館裏でのびてる。悠菜ちゃんがボツコボコにしたからね」

「まさかこいつらの治療費を出せって言うんじゃないだろな」

「冗談じゃない、従兄弟でもそんな義理は無い!!」

隆也も直樹も怒りを露わにして食ってかかってきた。対する綾人はどこ吹く風だ。

「そんなもの君らに請求するわけないだろ、彼らは自業自得何だから。生徒会から制裁を加える前に悠菜ちゃんが物理的に制裁しただけだよ」

「……さっさと結論を言ってくれ」

「直樹、君には今回の件が本家の耳に入らないようにしてくれ。隆也はこいつらの家が裏から悠菜ちゃんに危害を加えないように工作を頼むよ」

「はあ？そんなこと綾兄がやればいいだろ、何で俺がそんなことをしなくちゃいけないんだよ」

「ただの専務の息子でしかない俺にそんなこと出来るわけないだろ、だからこうやって頭低くして頼んでんのに」

「どこら辺が低いんだよ！！」

わざと偉そうに反り返った綾人を二人は殴りたい衝動に駆られたが、そんなことをしても一時的なものでこの幼馴染みでもあつたり従兄弟でもあつたりするこの男にそんなものが効かないことは経験上分かっていた。

「俺としては久瀬の本家の耳に入って退学してもらったほうがありがたいけどね、最近事あることに見合いの話を出されてうんざりしてるんだ。やたら女が絡んでくる」

「それは隆也がさっさと彼女を作らないのがいけないんだろ」

「兄さんまでゴリラ女と同じことを言うな！！」

「思ってることは皆同じなんだよ」

良いようにあしらわれるだけで、どうも遊ばれているようにしか見えな

綾人を睨んでみるが、本人は素知らぬ顔で紅茶を啜っている。

「とにかく、この話は無かったことにするからな。この際親父にもちゃんとやって、あの女を退学にしまろう」

「多分一緒に悠菜ちゃんの両親の職が無くなっちゃうんだけど」

「俺らには関係無い」

実際ついこの間まで存在を知らなかった人間の家庭の話など二人にはどうもでいいことだった。

しかもどうでもいいいうえに、どちらかといえば鬱陶しい存在ならなおさらだ。

綾人は頑なに拒否する二人を見てため息をついた。

そしてある単語を呟く

「霧中の女帝」

「は？」

「何だそれ」

綾人が言った単語の意味が分からなくて二人は聞き返した。

「だから霧中の女帝だよ、悠菜ちゃんの中学時代の陰の呼び名」

「……………」

「……………アホか」

「付近では有名みたいだよ、何でも滅茶苦茶荒れてた校内とついでにその付近の中学高校も纏めて一代で平定しちゃったんだって。そのお陰で」

「誰が信じるかよ、そんな話」

「篠原は何も言ってなかったぞ」

「凄いカリスマだよ、喧嘩が強いのも頷けるよ」

うんうんと二人を無視して頷く綾人に隆也と直樹はため息をついた。

「それがどうした」

「いやね、自分たちの尊敬する人がそんな大人の理不尽のせいで路頭に迷ったらどうするかなあって思ってる」

「別にどうもしないだろ」

「本当にそう思う？」

含みのあるいやな笑みを浮かべて身を乗り出してきた綾人に一瞬たじろいだ。

「違うのかよ」

「恐れを知らない子供は怖いよ」

「兄さんの言いたいことが全く分からないんだが」

「言いたいのはさっき言った通りだよ、悠菜ちゃんを守ってね」

「断る！！」

「はあ…なんて言うか可哀想だよ君たちは」

「綾兄でもこれ以上何か言ったらただじゃおかないぞ」

「だから可哀想だって言ってるんだけど、まあいいや。とりあえず、ここは俺に免じてお願いを頼まれてよ。俺が人にモノを頼むなんて珍しいだろ？」

ねっ？と言って手を合わせて頭を下げた綾人に二人は驚いた。

本人の言うとおり、一人でもやってしまう綾人が人にものを頼むのは珍しい。

しかもそれが自分のためではなく人のためだというのだから尚更だ。綾人にここまでさせる悠菜に隆也は少し興味がわいた。

「分かったよ、今回は頼まれてやる」

打って変わった隆也の言葉に直樹が慌て始めた。

綾人はありがとうと隆也に抱きつこうとしたが、隆也は懸命にそれを阻止する。

「おいおいどういう心境の変化だよ、まさかいつの間にかあの女に惚れたのか？」

「馬鹿言うな、兄さんが頼むから頼まれてやるんだよ。借りばっかで返してなかったからな」

「ちえっ、分かったよ」

仕方なく直樹も折れた。

綾人が嬉しそうに、君たちに恩を売っという良かったという綾人の

笑みに二人は考えが揺らぎそうになったが。

その後直樹と別れた隆也は被害者（？）の生徒たちのもとに今回の件の口封じに行ったため、寮の入り口についたときにはすでに日が暮れ始めていた。

しかも女子生徒が様子を窺っていた。

「何してる」

声をかけると一瞬ビクツとしてこっちを振り向くと、同時にあつと声を出した。

女子生徒の正体は悠菜だ。

「何してるんだ」

もう一度聞く。

「あんたにどう会おうかと悩んでた」

「はあ？」

予想外の返答にこっちが反応に困ってしまう。

「はいこれ」

そう言って押し付けてきたのはうさぎのぬいぐるみだ。

そういえば、先日あげるとか何とか言っていた気がするが、まさか本当にくれるとは思わなかった。

割と律儀な人間らしい。

「何でうさぎなんだよ」

「知らない」

「何でお前が知らないんだよ」

「じゃあ可愛いから」

「あのなあ……」

だが暗がりの中で悠菜も本気で困った顔をしたのでそれいじょうは言わない。

そのまま何も言わないでいると、いらなら返せとまで言ってきた。

ここで大人しく返すのは何の嫌だ。

「彼女が出来るまでの代わりにでもするといい」

「それだと一生世話になりそうだな」

「寂しさのあまりぬいぐるみに欲情するなよ」

「誰がするか、お前と一緒にするな!!」

「失礼な、あたしにそんなアブノーマルな趣味は無いわよ!!」

「中学時代荒れてたくせに？」

「ちよつとそれ誰に聞いたのよ、てゆうかそれとは関係ないでしょ!!」

急に取り乱した悠菜を一瞬隆也は可愛いと思った。

なんて言うか、表情がクルクル変わるのがいい。

「ああもう、とりあえず渡したからね。返品不可だからね、捨てるときはちゃんと分別して捨ててよ」

言うが否や走り去った悠菜を見、それからぬいぐるみを見て隆也はクックと笑った。

それからそのうさはしばらく部屋に飾られたが、部屋を訪れた直樹に爆笑されたため、程なくして物置の肥やしになるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0554k/>

突発的な関係

2010年12月12日14時10分発行